

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 2818 号

A Study of Cancer-Related-Fatigue in Patients Undergoing Postoperative Adjuvant Chemotherapy for Breast Cancer

乳がん術後補助化学療法実施患者を対象とした Cancer-Related-Fatigue に関する研究

齊藤 有希 (さいとう うき)

博士 (医学)

論文内容の要旨

がん化学療法の代表的な副作用である悪心・嘔吐や免疫力の低下による発熱は、制吐薬や抗菌薬の開発により、以前と比較すれば制御可能な例が増えてきた。一方、がん化学療法に起因する倦怠感 (Cancer-Related-Fatigue (CRF)) はがん患者の 60-90% に報告されているが、評価方法や治療方法が確立されておらず、患者の苦痛を取り除けてはいない。乳がんは十数年後まで転移再発があり得る疾患であり、術前術後の抗がん剤治療による再発抑制効果が示されているため、患者が抗がん剤治療を受けることは重要である。本研究では早期乳がん術後補助化学療法を受ける患者を対象に CRF 発現の実態を調査し、その発現状況を明らかにすることを目的とした。乳がん術後補助化学療法を 2022 年 4 月～2023 年 8 月に実施した。本研究に同意した患者 20 名を対象に自己記入式のアンケート調査を実施した。調査は治療実施直前、継続中、終了後に行い、CFS (CRF 評価票) と HADS (不安抑うつ評価票) の 2 種類の調査票を用いた。主要評価項目は初回化学療法と比較した各回の CFS の値の差、副次評価項目は化学療法終了 1 週間後の CFS の値と比較した終了後 3 か月、および終了後 6 か月における CFS の値の差とし、統計手法は非線形混合効果モデルを用いた。CFS は身体的倦怠感・認知的倦怠感・精神的倦怠感・総合的倦怠感の 4 つのカテゴリー別に、HADS は不安・抑うつ・総合の 3 つのカテゴリー別に評価票を集計した。初回の CFS がカットオフ値以上であったのは 30%、平均値は 19.7 であった。初回の HADS がカットオフ値以上であったのは不安; 35%、抑うつ; 10%、不安抑うつ状態 10% で、平均値は不安 6.35、抑うつ 6.15、合計 12.5 であった。推定されたグラフから変化点を考察すると、化学療法中は身体的倦怠感は増加、精神的倦怠感は緩やかに減少、認知的倦怠感は増加、総合的倦怠感は増加した。化学療法終了後は身体的倦怠感と精神的倦怠感と総合的倦怠感有意に減少し、認知的倦怠感は増加した。認知的倦怠感は化学療法終了後に増加していることから、必ずしも抗がん剤が倦怠感の直接的な原因ではない可能性を示した。本研究の意義は化学療法実施中の倦怠感の経時的変化を明らかにした点である。